

「1/1000 油谷コレクション・民具ラボ」についての活動報告

Activity report on "1/1000 Aburaya Collection/Mingu laboratory"

國政サトシ KUNIMASA Satoshi

(芸術学部デザイン領域)

1. はじめに

秋田市在住の 91 歳の蒐集家・油谷満夫氏は 70 年間にわたり、庶民の生活にあったあらゆる物の収集を続け、膨大なコレクション保管している。本稿は 2024 年より油谷満夫氏の収集資料を美術やデザインの視点を通して価値を再検証し、収集することとアートとアーカイブの方法を探るプロジェクトをまとめた報告となる。監修にキュレーターの服部浩之氏（東京芸術大学准教授/国際芸術センター青森館長）と参加作家として美術家の藤浩志（秋田公立美術大学教授）と筆者がメンバーとして、市民ボランティアと一緒に蒐集家・油谷満夫氏の収集品をどのように活用し、保存し得るか実践を通じて検証してきた。この活動を通して物の重要性やさまざまな社会問題、稀有な蒐集家である油谷氏の人物像に触れながら、この活動の意義と可能性について論じる。

1.1. 蒐集家・油谷満夫と収集品

昭和 9 年（1934 年）秋田県横手市生まれの油谷満夫（あぶらや・みつお）はこれまで 70 年にわたり収集を続け、これまで収集したものは約 50 万点といわれている。現在 91 歳という年齢で秋田県内に数カ所の私蔵倉庫を所有している。1992 年に私設博物館「秋乃宮博物館」（秋田県湯沢市）を開館（2010 年閉館）。2012 年秋田市に約 20 万点を寄贈した「油谷これくしょん」が 2014 年に旧金足東小学校に開館し、現在も一般に公開されている。そのほかの約 30 万点にも上る収集品は秋田県内数カ所の私蔵倉庫に保管されている。倉庫内には、人が最低限通れる細い通路をつくりながらあらゆる物や段ボール箱が積み上げられている。およそどこに何があるかは油谷氏のみが知り、自分でも把握しきれていない箇所もある。



(写真 1) 収集品について解説する油谷満夫氏

1.2. 民具（有形民俗文化財）の収蔵問題

民具（有形民俗文化財）の収蔵、保存、管理の問題が全国各地の博物館や郷土資料館で課題となっている。収蔵品の詳細な情報が学芸員でさえわからなくなっているケースもあるという。その場合は、活用方法がわからず、未整理のまま倉庫に放置してしまうことになり、活用方法の検討や価値づけが不十分なまま破棄につながってしまっている。加えて収蔵品が増えすぎて、保存する収蔵庫が満杯になり、施設の老朽化やスペース不足の問題も重なってくる。

2024年に奈良県立民俗博物館の一時公開中止収蔵資料の見直しによって、民俗資料の除籍や破棄するといった県知事の発言があり、日本民具学会が破棄問題に反対する声明を出した。その声明文の中では民具を収蔵し研究する意義と、民具を残す意義と同時に、現実的な現在の状況で収蔵する難しさが要約され、つづられている。

「民具の価値は一点のモノにあるのではなく、むしろ「群としての民具」を通して地域の社会・文化の在り方を明らかにできる点に大きな意義があります。（注1）」

「先人たちがその土地や風土にどのように適応し、たくましく生き抜いてきたかを体現する、またとない物証（注2）」

「とはいえ、現存する民具コレクションの多くは、暮らしが激変した高度経済成長期に緊急的に収集されたものであり、これらの中には基本情報が付随していないために価値づけが難しいものが多数含まれるのも事実です。また、博物館等の人員・予算の制約等によって、場合によっては整理・保管が適切に行われてこず、さらに近年では、博物館の職務がイベントや観光等へ偏重することにより、本来の使命である整理や調査研究による資料の価値づけ（文化財指定等を含む）が後回しにされる状況が顕著（注3）」

油谷氏の収集品は上述した博物館の現状とも重なる保存と継承の課題を抱えている。油谷氏は「普通の人々の生活を伝える」という収集方針の下、文化財としての価値を含まない物も多数収集している。秋田市に寄贈した約20万点は委託業者が整理し、管理しているが、油谷氏が今なお所蔵する収集品は未整理の物も多く、全体像の把握と価値づけは容易ではない。

（注1）日本民具学会「民具（有形民俗文化財）の廃棄問題に対する声明」抜粋

（注2）日本民具学会「民具（有形民俗文化財）の廃棄問題に対する声明」抜粋

（注3）日本民具学会「民具（有形民俗文化財）の廃棄問題に対する声明」抜粋

2. 本プロジェクト活動について

これまで3回にわたって開催したプロジェクト「分類整理活動」はメンバーの藤浩志氏主導の下、油谷氏の倉庫の一区画（全体の約1000の1）のをそのままトラックに積み込み、秋田市文化創造館のスタジオに広げ、ボランティアの人たちと一緒に埃を払い、汚れを拭き、どのような物がこれまで集められていたか手に触れながら見てみる。さらに、訪れた鑑賞者や市民ボランティアが補修した古い木製のパチンコ機を体験してみたり、古い船の汽笛で音を鳴らしてみたり、書物をめくってみたり、実際に物に触れ、質感や重さからかつてあった過去の情報を読み解くことが目的である。商店の包装紙や広告物、大正時代の銀行の預金手帳や個人的な日記など、文化財として価値づけされていない物も多く存在する。飲料水の缶や食料の品の箱など、現代でも使われていてなじみのある日用品もある。そういった物を専門家が並べるのではなく、一般の方が並べ広げることによって、資料の新しい側面を見せることができる展示となる。

また、イベントを開催し、プロジェクトで見えてきた点「物の価値づけ」について「表現者としての油谷氏」や、これからの課題点「アーカイブに関する可能性」や「活用の方法」など、イベントやシンポジウムを通じて専門家との意見交換をこれまで行ってきた。

2.1. これまでの活動

1、「第1回分類整理活動」を行う

第1回ではプロジェクト「1/1000 油谷コレクション」を立ち上げ、横手市浅舞の倉庫からトラックに積み込み、秋田市文化創造館スタジオに広げ、埃を払い、コメントカードに記入しながら、収集品の整理を試みた。

「1/1000 油谷コレクション」

日時：2024年7月1日-7月12日

会場：秋田市文化創造館スタジオ A1

助成：公益財団法人野村財団



(写真2左側) 第一回分類整理活動



(写真3右側) 収集品にコメントカードを書いていく。

2、トークイベント「残されたモノの価値を問う」

出演：服部浩之・藤浩志・國政サトシ・三富章恵（司会）

日時：2024年7月6日

会場：秋田市文化創造館 2F スタジオ A1



(写真4) トークイベント様子

3、記録集「油谷帖」

第1回「1/1000 油谷コレクション」で記録した写真をすべて紙面にレイアウトし、リソグラフで印刷して一冊の本にまとめた。398 ページに及ぶ本の厚さはコレクションの物量を塊として実感できる。國政サトシを中心に分類整理活動に参加した市民ボランティアとともに制作した。

「油谷帖」

仕様：A5 版 398 ページ（限定 30 部）

価格：3,500 円（税別）

発行日：2024年10月1日



(写真5) 油谷帖

4、シンポジウム「モノを残すことの価値を問うアーカイブ研究会」を開催
第2回「1/1000 油谷コレクション」は分類整理活動を行いながら、その一環としてシンポジウム「モノを残すことの価値を問うアーカイブ研究会」を開催し、民具やアーカイブの専門家やウェブやNFTの専門家を招いてディスカッションを行い、モノをどのように残すことができるか、その可能性と油谷氏の収集品を知ってもらう機会となった。

シンポジウム「物を残すことの価値を問うアーカイブ研究会」

日時：2025年1月25日

会場：秋田市文化創造館スタジオA1

助成：公益財団法人小笠原敏晶記念財団 交流助成

基調講演：「民具を残すことについて」神野善治（武蔵野美術大学名誉教授/日本民具学会会長）

事例紹介：佐藤知久（京都市立芸術大学芸術資源研究センター専任研究員/教授）、施井泰平（現代美術家、スタートバーン株式会社代表取締役）、寺田鮎美（東京大学総合研究博物館インターメディアテク特任准教授）、西村環希（株式会社Planet Labs Planet DAO Founder）

ディスカッション：参加者に藤浩志、國政サトシ、モデレーターとして服部浩之が加わって実施



(写真6) シンポジウムの様子

「1/1000 油谷コレクション」

日時：2025年1月20日-1月26日

会場：秋田市文化創造館スタジオA1

5、2025年「民具とアートとアーカイブの研究所（民具ラボ）」発足

民具とアートとアーカイブについて、実験や観察、対話を通して調査・検討する研究者や表現者、ボランティアによるネットワーク型のプロジェクト。第3回目の分類整理活動に加えて、月1回の「油谷さんと話す会」。油谷氏所蔵の活版印刷機を修理し、活用して印刷活動を行う「カップケン」などが行われた。

「民具ラボ」

日時：2025年8月4日-8月24日

会場：秋田市文化創造館スタジオA1

助成：公益財団法人野村財団

3. 活動を通して見えてきたこと

3.1. モノの価値について

本プロジェクトのメンバーである藤浩志が「モノの価値は、その人との関係によってつくられていく」というように、文化財としての歴史的な価値のほかに、未来に向けた新たな価値は個人と物との間で独自に育まれていくと言える。そのようなデザインや美術の基本態度とも通底する多様な視点、価値観を大切にすることで、現在は文化財未満だけれども、私たちの将来にとって必要となるかもしれないモノを、どのように保存・記録・活用していくか、その道筋をつくっていく段階にある。分類整理活動の中でも人によって、興味関心が異なり、懐かしい生活用品関心を寄せる人もいれば、フィルムカメラやガリ版などの器具に興味を示すもいる。博物館や資料館では手に取ることが難しいことがあるが、「モノが語る世界を感じてほしい」と語る油谷氏は物を手にとって確かめることを勧めている。質感や重さを実感することでおのずと感ずること、読み取れることがある。そこに油谷氏の収集品の新しい可能性を見いだすことができるのではないだろうか。

3.2. 表現者としての油谷満夫

「民衆、一般の人々の生活の道具集める」という独自の収集方針は、貴重品や価値づけがされている物に左右されず、食品の箱や調味料の缶、包装紙や景品など、あらゆる物が収集されている。服部浩之はそこに表現者としての蒐集家・油谷満夫の側面を取り上げた。物を残すことに人生をかけ、このような収集を続け、膨大なコレクションを所蔵する非常に珍しい存在と言えるだろう。油谷氏の収集への視点は、社会変化の中で過去のものとして必要がなくなり忘れ去られる物に目を向けていくことである。そしてそれがインターネットの中での情報ではなく物が持つ情報が大事なことを実感することができた。今後に向けて油谷氏の足跡と収集品がこれからの社会でどのような資料として活かせられるか考えなければならない。

3.3. 収蔵問題に対して

公立博物館などと油谷氏の収蔵の方法、方針は異なるものの、博物館の所蔵する有形文化財と類する資料も油谷氏は多数収集している。そのような資料は博物館の収蔵に関わる専門家や研究者以外の人にはなかなか触れることができないが、油谷氏の収集品を展示やワークショップ、アーティストによるプロジェクトを通して市民が鑑賞するだけでなく気軽に触れる機会をつくることで、これらのものを身近に感じてもらい、過去の庶民の生活を伝えていく手段として様々な手法を通して理解してもらおう。それによって、博物館が抱える将来に向けた保存と活用の問題を解決する糸口が見出されることを期待している。

3.4. 今後の活動に向けて

今後について、これまで秋田で行ってきた油谷満夫氏の収集品を使ったプロジェクトを別の地域で行うことで、地域の特性を交差させ意見交換や問題提起を繰り返すことが重要だと考えている。民具（有形民俗文化財）がこれほどまでに残された国は世界的に見ても珍しく、それらを有効に活用することに大きな意味があり、資料の活用の仕方によっては地域の資料を効果的に活用する方法となり得ると信じている。

4. 謝辞

本プロジェクトに多大なご協力をいただいた油谷満夫氏はじめ、NPO 法人アーツセンターあきたの三富章恵氏、本プロジェクトメンバーの藤浩志氏、服部浩之氏、アーカイブ方法のご意見や記録についてご助言をいただきました日本民具学会会長の神野善治氏、意見交換をさせていただきました京都市立芸術大学芸術資源研究センター専任研究員/教授の佐藤知久氏、国立歴史民俗博物館准教授の川村清志氏、そして市民ボランティアの方や秋田市文化創造館のスタッフの皆さまに感謝申し上げます。